

『阿弥陀経』読解（下）

畝 部 俊 英

三 「讚歎」、「称讚」、「称説」という語について

『阿弥陀経』の後半の部分、いわゆる六方段以下の個所に、「讚歎」という語が一カ所、「称讚」という語が七カ所、「称説」（高麗本、流布本による。宋・元・明の三本には「称讚」とある）という語が一カ所ある。これらの語を梵文『阿弥陀経』の相應箇所と対照してみると、梵文ではすべて *pari-kīrt*（ほめる、ほめて説く）を語根とする語であることが知られる。すなわち、鳩摩羅什訳の『阿弥陀経』では、「讚歎」、「称讚」、「称説」と訳し分けられているが、梵文においては、全く同じ語が用いられているのである。

そこで、これらの語が見出される『阿弥陀経』の個所を取り出して、梵文と対照し、どのように用いられているかを調べてみよう。

- (一) 舍利弗、如^カ我^{イマ}今^{イマ}者^{スルガ}讚^{スルガ}歎^{スルガ} 阿弥陀^ニ仏^ニ不可思議功德^ニ、東方亦^ユ有^{マシマシテ}二^ニ阿閼鞞^ニ・須弥相^ニ・大須弥^ニ・須弥光^ニ・

妙音仏、如_レ是_レ等恒河沙数諸仏、各_レ於_二其_レ国_一、出_二広長舌_一相、遍_レ覆_二三千大千世界_一、説_二誠実言_一。(キタマハクノコト)

(側線筆者、以下同じ)

tadyathāpi nāma Śāriputrāhametarhi* tān parikīrtayāmi, * evameva Śāriputra pūrvasyān diśya-
kṣobhyo nāma tatāgato Merudhvajo nāma tatāgato Mahāmerurūnāma tatāgato Meruprabhāso nāma
tatāgato Mañjuhvajo nāma tatāgata evaṇipramukhāḥ Śāriputra pūrvasyān diśi Gaṅgānādirālu-
kopamā buddhā bhagavantaḥ svakasvakāni buddhakṣetrāni jihvendriyeṇa sarñcchādayivā nirveṭha-
nain kurvanti.²⁾

＊藤田宏建博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀经』所収)による。

(シャーリプトラよ、あたかも、私が今、かの「極樂」を称讚しているように (parikīrtayāmi)、そのように
おぼに、シャーリプトラよ、東方には、アクシヨービヤという如来・メールドヴァジャという如来・マハーメー
ルという如来・メールプラバーサという如来・マンジュドヴァジャという如来がおられ、シャーリプトラよ、東
方におけるこのような「如来たちを」上首とするガンジス河の砂「の数」に等しい「ほどの多くの」諸仏・世尊
たちが、それぞれ自分の仏国土を舌根をもってあまねく覆って、「次のように」言明していられる。)

これは六方段の最初の部分である。「阿弥陀经」において、「讚歎」と訳されている語は、梵文では parikīrta-
yāmi という一人称、単数、現在の動詞である。主語である「我」は、『阿弥陀经』の説主・釈尊であり、目的語

は「阿弥陀仏不可思議功德」と訳されているが、梵文では *tān* という女性の代名詞であらわされている。これは当然文脈より、この文章の直前にある *Sukhāvati* (極樂) をうけているのである。とすると、『阿弥陀経』の「阿弥陀仏不可思議功德」と訳されている阿弥陀仏と違うことになる。

この違いについて、既に藤田博士はチベット訳および玄奘訳『称讚浄土仏撰受経』をも対照して指摘していらる。⁽³⁾チベット訳では、

ji ltar de bshin gśeḡs pa ŋas da ltar yoñs su brijod pa de bshin du……⁽⁴⁾

(あたかも、如来を私が今、称讚しているように、……………)

とあって、「如来」、すなわち、阿弥陀仏が指示せられていて『阿弥陀経』と一致するのに対し、玄奘訳では、

如⁽⁴⁾我今者称⁽⁵⁾揚讚⁽⁶⁾敷⁽⁷⁾無量寿仏無量・無辺・不可思議仏土功德……

とあって、無量寿仏の「仏土功德」、すなわち、極樂が指示せられていて、梵文と一致するのである。

従って藤田博士は「称讚せられるものが、阿弥陀仏の場合とその仏土極樂の場合との二つの所伝に分れる」と言われ、⁽⁶⁾梵文の *tān* (それを) というのも、チベット訳の *de bshin gśeḡs pa* (如来を) というのも、羅什訳と玄

梵訳の両シナ訳が意を取ってあらわしているように、具体的には阿弥陀仏または極樂の「不可思議功德」であるから、この(一)における称讚の対象は、意味の上からは、阿弥陀仏または極樂のもろもろの功德であると言われるのである。^(?)

そこで、以上の個所は、要するに、

私(＝釈尊)が阿弥陀仏(または極樂)のもろもろの功德を称讚する。⁽⁸⁾

の意をあらわしていると思われる。

さて次に「東方亦有」とあって、東方の主なる諸仏の名をあげ(以下、六方段では、南、西、北、下、上の主なる諸仏の名をあげるといふ、同じ形式である)、ここでは東方段のみ取り上げておく、そして六方段すべてに、

如^キ是^ノ恒^ノ河^ノ沙^ノ数^ノ諸^ノ仏、各^ケ於^テ其^ノ国、出^シ長^ノ舌^ノ相、遍^ク覆^ヒ三^ニ千^ニ大^ニ千^ニ世界、説^{ハク}誠^ノ実^ノ言^ヲ。

とある。が、この個所は、直前の、

舍利弗、如^ク我^ガ今^ノ者^ヲ讚^ム歎^ス阿^ノ弥^ト陀^ノ仏、不^レ可^レ思^レ議^ノ功^ノ徳、……

の文の「如」で結ばれているのであるから、この(一)の全体の主意を要約してあらわしてみると、

あたかも、私(≡釈尊)が今、阿弥陀仏(または極樂)のもろもろの功德を称讃している(parikīrtayāmi)ように、
そのようにまさに、東方(南・西・北・下・上方)の諸仏が「次のように」言明していられる(nirveśhanam
kurvanti)。

ということになるであろう。従って、

釈尊が阿弥陀仏(または極樂)のもろもろの功德を称讃する。

に対応して

諸仏が「次のように」言明する。

とあらわされているのである。

この「言明する」に相應するシナ訳として、羅什訳では「説誠実言」、玄奘訳では「説誠諦言」とある。⁽⁹⁾

両シナ訳とも「説」の意があらわちれてくる。「称讚」(parikīrtayāmi)と「説誠実言」(nirveṭhananī kurvanti)が対応して用いられているのは、この両者に共通の意味があるからであらう。それは pari-kīrti には「ほめて説く」意があり、nirveṭhananī には「誠実の言を説く」という意があって、両者とも「説く」という共通の意があるからであらう。

以上の事から知られるように、この(一)における「称讚」(parikīrtayāmi)は、「ほめて説く」の意であり、ほめて説くことができるのは、積尊であり、ほめて説かれる対象は、阿弥陀仏(または極樂)のもろもろの功德である。

(二) 汝等衆生、當信是稱讚不可思議功德・一切諸仏所護念經。(2)

pattiyatha* yūyamidamacintyaguṇaparikīrtanānī sarvabuddhaparigrahaṇī nāma dharmaparyāyaṇi. ①

*藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収)による。

「あなたたちは、この不可思議なもろもろの功德の称讚(parikīrtanānī)を、一切諸仏の摂受を信受せよ」(と)。

この箇所は、(一)の続きの文であり、諸仏が衆生たちに「誠実の言を説く」という、その諸仏の言葉である。六方

段のすべてに見出されるから、六カ所にある。

『阿弥陀経』の「称讚」は、梵文では *parikirtanam* とあるから、*pari-kirt* を語根とする「ほめて説くこと」という意味の名詞である。

さて (一) において、梵文では、*parikirtayāmi* (称讚する) の目的語は、*taṃ* (それを) という代名詞であらわれ、チベット訳では、*de bshin gsegs pa* (如来を) とあらわされているのであるが、羅什訳と玄奘訳の両シナ訳があらわしているように、具体的には、阿弥陀仏または極樂の不思議なもろもろの功德を意味していることが知られるのは、この (一) だ、

idamacinīyaguṇaparikirtanam

(この〃不思議なもろもろの功德の称讚〃)

とあることからである。(二) では名詞形の *parikirtanam* (称讚) であらわされているが、意味からすれば、*acinīyaguṇa* (不思議なもろもろの功德) が *parikirtanam* の目的語であるからである。

ここでは主語はあらわされていないが、(一) とのつながりより、积尊ということになるであろう。これより以後の文意からすれば、諸仏も含められるかもしれないが、次に、

sarvabuddhaparigrahanī

(シ一切諸仏の摂受ク)

と分けてあらわされていることよりすれば、「シ不可思議なもろもろの功德の称讃ク」では積尊が、「シ一切諸仏の摂受ク」では諸仏が、意味上の主語であるように思われる。

ところで、ここに「シ不可思議なもろもろの功德の称讃ク」と並んで「シ一切諸仏の摂受ク」が出てくる。六方段に諸仏の名があげられているとはいっても、これは少し説明を要する。そこで六方段が終わるとすぐにその理由が述べられる。

舍利弗、於汝意云何。何故名為一切諸仏所護念經。舍利弗、若有善男子・善女人聞是經受持者、及聞諸仏名者、是諸善男子・善女人、皆為一切諸仏共所護念、皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。

※(一) 經受持者及聞諸仏は流布本では諸仏所説名及經とする。

※(二) 共之、㊸、㊹、㊺。

tatkin manyase Śāriputra kena kāraṇenāyaṁ dharmaparyāyaṁ sarvabuddhaparigraho nāmo cyate. ye keci cchāriputra kulaputrā vā kuladhūhitaro vāsya dharmaparyāyasya nāmadheyāṁ śroṣyanti teṣāṁ ca buddhānāṁ bhagavatāṁ nāmadheyāṁ dhārayiṣyanti sarve te buddhaparigṛhītā bhaviṣya-

nyavinivartanīyāśca bhaviṣyanīyanūtarāyān samyaksaṃbodhau. 14

(シャーリプトラよ、これをどう思うか。どういう理由で、この法門は一切諸仏の撰受々といわれるのであるか。シャーリプトラよ、およそいかなる善男子たちや善女人たちであっても、この法門の名前を聞き、またこれらの諸仏・世尊たちの名前を持つてであろうならば、かれらはすべて、諸仏によって撰受せられた者たちとなり、またこの上ない正しいさとりに向って退転しない者たちとなるであろう。)

右のように「一切諸仏の撰受々」といわれる理由が述べられているのであるが、既に指摘せられているように、⁽¹⁵⁾ 六方段以下では、阿弥陀仏から釈迦・諸仏へと主題が移っていくことは確かである。それは、後に検討するように、「称讚する」という行為が可能なのは、釈迦・諸仏およびそれに準ずる者に限るといふ初期大乘経典に共通の了解にもとづいていて、『阿弥陀経』のように阿弥陀仏または極樂の称讚を強調しようとする、どうしても称讚する行為の主体である釈迦・諸仏に重点が移っていくことになるのであろう。

ところで、既に述べたように、⁽¹⁶⁾ 『阿弥陀経』は釈迦・諸仏が称讚する阿弥陀仏の極樂への願生心の発起を、衆生に、釈尊が勧めるのが眼目である。とすれば、六方段の直前にある

舍利弗、我見^ル是利^ノ故^ニ、説^ク此^ノ言^ヲ。若^シ有^ニ衆^生、聞^ク是^ノ説^ノ者^ヲ、應^ニ當^ニ發^ス願^ヲ、生^シ彼^ノ國^ニ土^ニ。⁽¹⁷⁾

tasmāttarhi Śāriputra*, idamarthavaśain saṃpaśyamāna evaṃ vadāmi. saṅkīṭya kulaputreṇa vā kuladhitrā vā tatra buddhakṣetre cittapraṇīdhānain kartavyam.¹⁸

(シヤールプトラよ、それだからここに、「私(＝釈尊)は」この道理を見て、次のように説く。

「つつしんで、善男子や善女人によって、かしの仏国土に向って「生れたいという」願いの心がおこされるべ
おぼやる」〔20〕)

までが、△阿弥陀経▽の原初形態における内容であり、いわば正宗分にあたり、六方段以下は、釈迦・諸仏による称讃であるから『阿弥陀経』全体の構成からみると少し比重が大きいのであるが、後に付加せられ、流通分に当たるものとする見方も、原典の成立順序に照応してできるのではなからうか。

(三) 舍利弗、如^レ我今者称^ニ讚^{スルガ} 諸^レ仏不可思議功德^ニ彼^レ諸^レ仏等亦称^ニ説^{スルガ} 我不可思議功德^ニ而作^ニ是言^一。⁽²⁰⁾

※説―讚^①、②、③の三本。

tadyathāpi nāma Śāriputrāhametarhi teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatāmevamacin^レtya^レgūṇāṃparikīrtayāmi*, evameva Śāriputra mamāpi te buddhā bhagavanta evam acin^レtya^レgūṇāṃparikīrtayanti.²¹

※藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収)による。

(シャーリプトラよ、あたかも、私が今、かれら諸仏・世尊たちの不可思議なもろもろの功徳をこのように称讚してゐる (parikirtayami) ように、シャーリプトラよ、そのように、まさに、かれら諸仏・世尊たちもまた、私の不可思議なもろもろの功徳を次のように称讚してゐる (parikirtayanti)。

『阿弥陀経』の「称讚」とあるところも、「称説」(前に述べたように、宋、元、明の三本では「称讚」とあるところも、pari-kirt を語根とする動詞である。

この箇所は、文の構造においては、(一)とほとんど同じである。大きな違いといえは、(一)の「讚歎」の対象が「阿弥陀仏不可思議功徳」(梵文では極楽)であったのが、(三)の「称讚」の対象が「諸仏不可思議功徳」と「我(即ち釈尊の)不可思議功徳」になっていることである。ここにも阿弥陀仏から釈迦・諸仏へと主題が移っていることが認められる。

ところでこの「如我今者称讚諸仏不可思議功徳」は一体どこを受けているかといえは、先ほど取り上げた「一切諸仏所護念経」について、釈尊が説明している部分の、

若有^シ善男子・善女人、聞^キ是^ノ経^ヲ受^シ持^シ者^ハ及^キ聞^キ諸^ノ仏^ノ名^ヲ者、是^ノ諸^ノ善男子・善女人、皆^シ為^リ一^ニ切^ノ諸^ノ仏^ニ共^ニ所^ニ護^レ念^セ、皆^シ得^レ不^レ退^ニ於^テ阿^ニ耨^ニ多^ニ羅^ニ三^ニ藐^ニ三^ニ菩^ニ提^ニ。

のうち、特に「及聞諸仏名者、……」以下の個所であろう。梵文によれば、

tesāhi ca buddhānāhi bhagavatāhi nāmadhēyāhi dhārayiṣanti sarve te buddhaparigṛhita bhaviṣyā-
ntyavinivartanīyāśca bhaviṣyāntyanuttarāyāhi samyaksaṃbodhau. ㊟

(またこれらの諸仏・世尊たちの名前(名号、nāmadhēya)を持つてあろうならば、かれらはすべて、諸仏に
よって撰受せられた者たちとなり、またこの上ない正しいいきとりに向って退転しない者たちとなるであろう。)

とあって、諸仏の名前を持つこと(持つ)によって、諸仏の撰受を得、不退転の者たちとなるであろうと説かれている。

これは、勿論、六方段に諸仏の名前があげられ、それらの諸仏がこの法門を信受せよ、と説きすすめていること
の展開ではあるが、極楽と阿弥陀仏のもろもろの功德の称讃を主題としてきた經典にしては、奇妙な感じを与え
る。そこで流布本では、この個所の、

聞^キニ是^シ經^ノニ受^シ持^シ者^ヲ及^ヒ聞^キニ諸^ノ仏^ノ名^ヲ者^ヲ

とあるところを、

聞^カニ是^ノ諸^ノ仏^ノ所^ノ説^ク名^ヲ及^ヒ經^ノ名^ヲ者^ヲ

と改め、阿弥陀仏に統一している。しかし、このように改めると、「如我今者称讚諸仏不可思議功德」の具体的内容がかくれてしまうことになる。この場合の「如我今者称讚……」というのは、「我」である釈尊が「今者」諸仏の不可思議功德をほめて、説いていることであるからである。流布本のように改めれば、阿弥陀仏に統一せられるようであるが、問題は残るのである。藤田博士の指摘せられるように、⁽²³⁾六方段以下の後半の部分は、他の諸仏称揚思想の影響を受けて、前半の部分よりも遅れて成立し、付加せられたものであろう。

以上、『阿弥陀経』における「讚歎」、「称歎」、「称説」は、梵文において、すべて pari-kirt を語根とする動詞または名詞であり、その主語は釈迦または諸仏であり、目的語は阿弥陀仏（または極樂）、諸仏、釈尊のもろもろの功德であって、

釈迦・諸仏がもろもろの功德を称讚する。

という場合にのみ、pari-kirt は用いられていることが知られた。

これは既に拙論⁽²⁴⁾において論じた梵文『無量寿経』の（本稿でも、後の四『無量寿経』の項で取り上げる）、

釈迦・諸仏がアミターバ如来の名号を称讚する。

と対照すると、『阿弥陀経』の場合には、称讃の対象が、もっぱらもろもろの功德に限られていて、釈迦・諸仏が阿弥陀仏の名号を称讃するという諸仏称名の思想は見出されないのである。

さてこのような『阿弥陀経』の「称讃」pari-ṅkīrtという語の意味・用法は、独自のものか、普通の、ありふれたものなのだろうか。他の經典にはどのように用いられているのだろうか。

このような問題について、一応のフットラインを把握するために、主なる大乘經典のうち、梵文に限定して、pari-ṅkīrtを語根とする語の意味・用法を見てみよう。

(一) 『八千頌般若経』

(a) atha khalvāyusmānānando bhagavantametadavocāt—na bhagavan dānapāramitāyā varṇaṇī bhāṣate, na nāmadheyaṇī parikīrtayati, na śīlapāramitāyāḥ, na kṣāntīpāramitāyāḥ, na vīryapāramitāyāḥ. na bhagavan dhyaṇapāramitāyā varṇaṇī bhāṣate, na nāmadheyaṇī parikīrtayati, apī tu prajñāpāramitāyā evaikasyā bhagavān varṇaṇī bhāṣate, nāmadheyaṇī ca parikīrtayati. bhagavānāha—evametadānanda, evametāt. prajñāpāramitāyā evāhamānanda varṇaṇī bhāṣe nāmadheyaṇī ca parikīrtayāmi, nānyāsāṇī pāramitānām. ㊟

(そのとき尊者アーナンダは世尊に次のように言った。

「世尊よ、世尊は布施波羅蜜の讚歎を (varṇam) 説かれ (bhāsate) す、〔布施波羅蜜の〕名前を (nāma-dheyam) 称讚せられ (parikīrtayati) す、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、世尊よ、禅定波羅蜜の讚歎を説かれず、〔禅定波羅蜜の〕名前を称讚せられず、ただ般若波羅蜜のみの讚歎を説かれ、そして〔般若波羅蜜の〕名前を称讚せられる。〕」

世尊は言われた。

「アーナンダよ、そのとうりである。そのとうりである。アーナンダよ、私はただ般若波羅蜜のみの讚歎を説き、そして〔般若波羅蜜の〕名前を称讚するが、その他の波羅蜜〔については〕は〔そのようにし〕ないのである。」

——「第三章」——

右の個所は、『八千頌般若経』の第三章であるから、いわゆる原始般若経の部分ではないが、それでも数ある般若経類の中では、古層に属するものであろう。何遍か parikīrtayati という語が出てくる。主語は世尊であるから、釈尊である。ここでは「ほめて説く」という同じ意味をあらわすのに、「讚歎を (varṇam) 説く (bhāsate)」というのに対し、「名前を (nāmadheyam) 称讚する (parikīrtayati)」とついで parikīrt が用いられている。

(b) tasmātarhi ānanda prajñāpāramitāyān parikīrtitāyān sarvāṅ śai paramitāḥ parikīrtitā

bhavanti. ²⁸ (マーナンダよ、それだから、般若波羅蜜が称讚せられたときには (parikīrtitāyān) / 六つのすべての波羅蜜が称讚せられた (parikīrtitā) ことになるのである。 — 「第三章」 —)

この箇所も、第三章にある。この parikīrti は、両方とも、釈尊が「説く」「ほめて説く」といり、極めて普通の意味・用法である。

c) atha khalu Śakro devānāmiṅdro bhagavantametadvocat—na tāvadime bhagavaṇiṣṭhāgātenār-hatā samyaksaṁbuddhena prajñāpāramitāyāḥ sarve guṇāḥ parikīrtitāḥ, ………. ²⁹
(そのとき、神々の主・シヤクラは世尊に次のように言った。

「世尊よ、いまだ如来・応供・正等覚者によって、この般若波羅蜜のすべてのもうもの功德が称讚せられて (parikīrtitāḥ) しません。………」 — 「第三章」 —)

これも第三章に見出されるものである。否定文の形式であらわされているが、

如来(＝釈尊)がもうもの功德を称讚した。

と、このように直してみると、これは、『阿弥陀経』と全く同じ意味・用法となる。

d) *atha khalu āyusmān Subhūtirbhagavantametadvocat—guṇā ime bhagavanīśeṣān kulaputrāṇān kuladuhirṇān ca bhagavatā parikīrtitāḥ.* 28)

(そのとき、尊者スプーティは世尊に次のように言った。

「世尊よ、彼ら善男子たちや善女人たちのこれらのもろもろの功德が世尊によって称讚せられました (parikīrtitāḥ)。」

——「第一章」——

この第一章の個所も、『阿弥陀経』と全く同じ意味・用法のものである。

e) *punaraparamānanda yasmin samaye bodhisattvasya mahāsattvasya nāmagrahaṇān vā gotragrahaṇān vā dhūtaguṇaparikīrtanān vā bhavati, …….* 29)

(アーナンダよ、次にまた菩薩・大士の名が語られ、氏族が語られ、頭陀のもろもろの功德の称讚が (parikīrtanān) あるとき、…………)

——「第二章」——

この場合の「称讃」(parikīrtanain)の対象も、「もろもろの功德」である。

(f) *vayamapyevahrūpān dharmānispādayisyāmo yaduta anuttarān buddhadharmān ye tvayā parikīrtita itī.*³⁶⁾

「私(＝長者の娘)もまたそのようなもろもろの徳性を(dharmān)ゝすなわち、あなた(＝サダープラルディタ菩薩)によって称讃せられた(parikīrtitā [ā])と」の上ない仏陀のもろもろの徳性を、成就するでしょう」と「言った」。

——「第三〇章」——

右の場合の「あなた」はサダープラルディタ(常啼)という菩薩であるが、仏陀に準ずる者としての扱いなのであろう。称讃の対象は、「もろもろの徳性」(dharmān)である。

さて『八千頌般若経』が称讃の対象とするものは、どんなものかを知る手がかりとして、次の個所は、最もよい例である。

(36) ……buddhā bhagavanto nāma ca gotraṁ ca balaṁ ca varṇaṁ ca rūpaṁ ca parikīrtayamānā-rūpā dharmān deśayanti, udānaṁ codānāyanti tasya bodhisattvasya mahāsattvasya, ……³⁷⁾
(……諸仏・世尊たちは「功德を具する菩薩・大士の」名(nāma)ゝ 氏族(gotraṁ)ゝ 力(balaṁ)ゝ 色(varṇam)ゝ

形 (rūpaṇi) を称讚して (parikīrtayamānarūpa) 、法を示し、その菩薩・大士について感興の語を發する。

——「第二十七章」——

この個所によれば、諸仏・世尊たちが称讚する対象は、名、姓氏、力、色、形である。「称讚する」ということは、これまで何度も述べてきたように、「ほめて説く」ことであるが、「法を説く」という場合には、*dharmam desayanti* とあらわされていて、ここでははっきり区別せられている。この区別は、後に取り上げる梵文『無量寿經』でも、認められる。梵文『無量寿經』では、「世尊は私に法を示して下さる (dharmaṃ desayatu) 」。に対し、「世尊は私にもろもろの様相を称讚して下さる (ākārān parikīrtayatu) 」。とある。称讚の対象は「もろもろの様相」である。

この (g) では、功德はあげられていないけれども、功德という語も、やはりここにあげられている語の系統に属するものであろう。

以上の用例から、『八千頌般若經』における *pari-kīrt* を語根とする語の意味・用法は、次のように言うことができるであらう。

主語は釈迦・諸仏であり (ただし (f) だけは菩薩)、*pari-kīrt* を語根とする語は、「ほめて説く」の意味で用いられ、そのほめて説かれる対象は、名前 (*nāmadheya*)、名 (*nāman*)、功德、徳性 (*dharma*)、姓氏、力、色、

形などである。

① 『法華經』

(a) tato vayanī karaṇasaṅgrahaṇa upāyakaṣāya nisevamaṇāḥ,
phalābhīśāśaṁ parikīrtayantaḥ samādāpemo bahubodhisattvān. ②

(それゆえ、われわれ「諸仏」は因縁を把握することによって、善巧方便を使って、「仏陀になる」果報を望むことを、称讃して (parikīrtayantaḥ) 多くの菩薩たぐいを導くのである。——「第二章」——)

『法華經』においても、第三章という、早くに成立した章に、右のような用例が見出される。主語は諸仏であり、「称讃する」(parikīrtayantaḥ) というのは、やはり「ほめて説く」意である。「称讃する」対象は、ここでは「仏陀なる」果報を望むことである。

(b) yatāḥ prabhīryahaṁ kulaputrā asyaṁ sahāyaṁ lokadhātau sattvānāṁ dharmāṁ deśāyamyanyeṣu
ca lokadhātukoṭīnāyutasasahasreṣu, ye ca mayā kulaputrā atrāntarā tathāgatā arhantaḥ samyak-
sambuddhāḥ parikīrtitā dipanīkaratathāgataprabhīryaḥ……… ③

(善男子たちよ、それよりこのかた、私はこの娑婆世界およびその他の幾百・千・コーティ・ナユタの世界において、衆生たちに法を示し、そして、善男子たちよ、そのあいだにディーパンカラ如来をはじめとする如来・応供・正等覚者たちが、私によって称讃せられ (parikirtitāh) ……………。 — 「第一章」 —)

ここでも主語は「私」、すなわち釈尊であり、「称讃せられ」とは「ほめて説かれ」ることである。その対象は「ディーパンカラ如来をはじめとする如来・応供・正等覚者たち」であるが、このような如来たちが「ほめて説かれる」とは、具体的には如来たちの名号とか功德が説かれることであろう。

(c) *yacca puṇyaṃ bhaveteṣāṃ niṣevitvā imāṃ kriyāṃ, kalpakotīśahasrāṇi ye pūrvāṃ parikirtitāḥ.*³²
(これらの行を幾千・コーティの劫のあいだ実践し已れば、かれらには、前に称讃された (parikirtitāḥ) とする何らかの福德が (puṇyam) あることになるであろう。 — 「第一章」 —)

右の個所も第一大章にあるが、ここでは、「前に称讃された」(pūrvāṃ parikirtitāḥ) とは、釈尊がこの『法華経』の前の方で、「すでに説いた」という意味で、用いられている。「説いた」といっても、釈尊が説いた場合には、「ほめて説いた」という意を含んでいるのである。鳩摩羅什は「如上之所説」と訳している。説かれた対象は

「福徳」 (punyaṃ) じふね。

(d) ye cemaṃevanirūpaṃ sūtrāntaṃ dhārayiṣyanti vācayiṣyanti deśayiṣyanti paryavāpṣyanti parebhyaśca vistareṇa saṃprakāśayiṣyanti teṣāmevamiṣṭho vipāko bhaviṣyati yadr̥śo mayā pūrvaṃ parikṛtitaḥ……………⁽³⁶⁾

(〔将来〕このような經典を受持し、読誦し、説き、完全に了解し、他の人々に詳しく説き明す者たちには、私によつて前に称讃せられた (pūrvaṃ parikṛtitaḥ) ような好ましい結果が生じるであらう、……………。

——「第十九章」——

これは(c)の用例とまったく同じもので、釈尊が「前にすでに説いた」という意味である。羅什は「如向所説」と訳している。すでに説かれた事柄は、「好ましい結果」 (iṣṭho vipāko) である。

ここで注意されることは、この個所のはじめの「このような經典を受持し……………他の人々に詳しく説き明す者たち」とある部分である。これは大乘經典によく出てくるフレーズの一つであるが、この場合の「他の人々に詳しく説き明す者たち」とは、釈尊の説く大乘の法を聞き、もろもろの功徳などの称讃を聞いて、喜悅・歡喜を得、聞いたものを自身の上に受持し、深め、完全に了解した衆生たちのことである。⁽³⁶⁾

(c) tathāgatāsrāvakaṇāṇi ca varṇaṇi bhāṣeta bodhisattvānāṇi ca mahāsattvānāṇi guṇakoṭīna-yutaśatasahasraṇi parikīrtayepareśāṇi ca saṃprakāśayet.....³⁷⁾

(……………「この善男子・善女人は」如来の声聞たちの讚歎を説き (varṇaṇi bhāṣeta)′ 菩薩・大士たちの幾百・千・コローティ・ナユタのもろもろの功徳を称讚し (parikīrtayet)′ また他の人々に説き明かすであろう (saṃprakāśayet)′ ……………。 — 「第一六章」 —)

ここでは如来滅後の善男子・善女人が主語となっている。『八千頌般若経』に一カ所、菩薩が主語となっている例があったが、善男子・善女人が主語となっているのは、これが初めてである。「称讚」の対象は、もろもろの功徳である。

(d)の所で述べたように、「他の人々に説き明す」のは衆生たちであるから、善男子・善女人が主語であってもよいが、「称讚する」の主語が善男子・善女人であるのは、異例である。この事は、次の例によっても知られるであろう。

(f) tasmācchruṇṭivā idamevarūpāni parikīrtitāni dharmu svayam svayambhuvā,
āragayitvā ca punaḥ punaścimāṇi prakāśayetsūtra namaṃha nivṛte.³⁸⁾

(それゆえ、自立者(＝仏陀)が自から称讚した (parikīrtitāni)′ このような法を聞いて、再々、(諸仏を)喜

ばせ、私が涅槃に入った後には、この経典をこの世で説き明す入きつゝもむ (prakāśayeti)。

——「第十九章」——

右の個所の直前で、

buddhāna koṭīśata caiva bhonti na ca te pīmaṃ sūtra prakāśayanti.

(幾百・ローティもの諸仏はいるが、かれらはこの経典を説き明や (prakāśayanti) なご。)

というように、諸仏でも、「説き明す」(prakāśayanti) という動詞の主語となる用法も認められるが、一般的には、(f)のように、「覺者によつて称讚せられた (parikīrtitaṃ) 法(ただし、法が称讚の対象となっている例はめずらしい)を聞いて、衆生たちが説き明す (prakāśayanti) 」というように、あらわされるのである。

39) yasya kasyacidajita bodhisattvasya mahāsattvasyemahā dharmaparyāyam tathāgatasya parinirvitasya dhārayata imam evaṃrūpā guṇā bhavyeurye mayā parikīrtitāh.³⁹⁾

(アジタよ、如来(＝私)が涅槃に入ったのち、だれかある菩薩・大士がこの法門を受持するならば、私によつて称讚せられた (parikīrtitāh) のちうなもらうの功德があるであらう。

これは、梵文『阿弥陀経』、『八千頌般若経』で見えてきた *pari-kirt* の意味・用法とまったく同じ用例の一つである。主語は如来である私―釈尊―であり、「称讃せられた」(*parikirtitaḥ*) とは「ほめて説かれた」の意であり、その「ほめて説かれた」対象は「もろもろの功德」である。

最後に、このような例もあるので、紹介しておこう。

(h) *na śakyamī vacā parikīrtayitum.*¹⁰⁾

(言葉によつては説くことができない) (*parikīrtayitum*)。

釈尊が意味上の主語であり、釈尊が説くのであるから、*parikīrtayitum* とあらわされているが、ここではもう単に「説く」という意味であろう。

以上、八カ所の用例をあげて、梵文『法華経』における *pari-kirt* を語根とする語の意味・用法を検討してみたのであるが、結果はやはり、『阿弥陀経』や『八千頌般若経』の意味・用法とほとんど同じである。ただし、一カ所だけであるが、主語が「善男子・善女人」とあったのと、称讃の対象が「法」とあったのが、注意せられる。

㉔ 『十地経』

㉔) *atha khalu Vajragarbho bodhisattva āsān daśānān bodhisattvabhūminān nāmadheyamātraṇi parikīrtya tūṣṇiṇi vabhūva.* ㉔)

(そのとき金剛蔵菩薩は、これら十の菩薩の地の名前だけを称讚して(parikīrtya)、沈黙してしまった。

——「序章」——)

これは『十地経』の最初の方の一部分であるが、ここでは金剛蔵という菩薩が主語であり、「称讚して」(parikīrtya)とは、やはり「ほめて説いて」とか「具体的に、一つ一つ取りあげて説いて」という意味であり、その対象は「これらの十の菩薩の地の名前 (nāmadheya)」である。

ここでは、金剛蔵という菩薩が、この『十地経』において今から説かれる十地の名前をあげ、ほめて説くのであるが、それは諸仏の神通力を受け三昧に入ることによってであると、経は説いている。すなわち、金剛蔵は菩薩であるが、明らかに諸仏の資格において、十地の名前を「称讚して」いるのである。

ところで、称讚の対象が名前 (nāmadheya) であるのは、これまで見てきたところでは、『八千頌般若経』にあった。それは、

prajñāpāramitāyā evāhamānanda varṇaṅ bhāṣe nāmadheyāni ca parikīrtayāmi, ………。(42)

(アーナンダよ、私はただ般若波羅蜜のみの讚歎を説き、そして〔般若波羅蜜の〕名前を(nāmadheyāni) 稱讚するが (parikīrtayāmi)′ ………。)

とどうもうご用いられてきた。

この nāmadheya を稱讚するどうう用例は、『無量壽經』に於いて、最も多く見出される。そこで、次に梵文『無量壽經』の parikīrt を語根とする語について取りもたせぬ。既に論じたこともあろう、この必要箇所だけ紹介しておこう。

㊦ 『無量壽經』

(a) tasya me Bhagavān sādhu tathā dharmāni deśayatu, yathāhaṅ kṣīpram anuttarāni samyak-sambodhim abhisambudhyeyāmi*, asamasamaṣ tathāgato loka bhavyeyāni; tāniś ca me Bhagavān ākāraṅ parikīrtayatu, yair ahaṅ buddhakṣetrasya guṇavyūhasaṅpadāṅ parigīhṅīyam*。(43)

＊藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量壽經・阿彌陀經』所収)による。

(私が速かにこの上なる正しくやむべきやむべき、世間になんぞ等しいものなら如来となることができような、そのような法を (dharmaṅ)′ 世尊だんごかこの私に示してやう (deśayatu)。また、私が仏国土の功德

の莊嚴の成就を攝め取ることができるよう、それらのもろもろの様相を (ākārān) ‘世尊は私に称讚してト云ふ (parikīrtayatu)’。

先づ nāmadheya を目的語とし、pari-kīrt を語根とする語の用例を、(a)、(b)の二例、あげてみる。

既に『八千頌般若経』の(四)の項で、少し触れておいたように、ここには「世尊は私に法を示してト云ふ (dharmaṃ deśayatu)’と対し、「世尊は私にもろもろの様相を称讚してト云ふ (ākārān parikīrtayatu)’と云ふもろもろの場合には「説へ」の意であるが、「法」(dharma) の場合では、dis が、「もろもろの様相」(ākārāṅ) は、名、姓氏、力、色、形があげられていたが、この「もろもろの様相」というのも、これらの系統の語の一つなのであろう。もっとも『法華経』の(五)の項のように、法が称讚の対象としてあらわされている例もあることも述べてはならぬ。

(g) tad anenānanda paryāyeṇa sā lokadhātuh Suktāvatīty* ucyate sarīkṣiptena, na punar vistareṇa kalpo by* ānanda parikṣayaṃ gaocchet, Suktāvatyāṃ lokadhātāu sukhakāraṇeṣu parikīrtiyamāneṣu*, na tu eva śakyaṃ teṣāṃ sukhakāraṇāṇāṃ paryanto 'dhigantum. (4)

*藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀经』所収)による。

(ブーナムダよ、こうこうわけで、) かの世界は、極樂と略してつられるのであるが、「これより」更に詳し

く「は説か」ない。フーランダよ、もし極楽世界におけるもろもろの安樂の理由が称讚されていゝるあいだに (parikīrtyamāneṣu) 一劫でも過ぎ去ってしまうであろうが、しかもなお、それらもろもろの安樂の理由の際限は知ることばいなきならのである。)

この場合の「稱讚されていゝるもろもろ」(parikīrtyamāneṣu) と同じのも、「ほめて説かれていゝるもろもろ」という意であり、意味上の主語は、勿論、世尊である。nāmadheya を目的語としない用例は、以上の二つであるが、次に nāmadheya を目的語とする用例を見つゝみよ。

㉔) sacen me bhagavan bodhiprāptasya, nāprameyeṣu buddhākṣetreṣv aprameyāsānikhyeyā buddhā bhagavanto* nāmadheyaṅ parikīrtayeyur, na varāṅ bhāṣeran, na praśaṅsām abhyudīrayeyur, na samudīrayeyur, mā tāvad aham anutarāṅ samyaksambodhim abhisambudhīyem. (5)

＊藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収) による。

(世尊よ、たとふ私たちが得たところのも、もつちも無量の仏国土における無量・無数の諸仏・世尊たちが、「私」の「名」を (nāmadheyaṅ) 称讚せず (na parikīrtayeyur) 讚歎を説かず (na varāṅ bhāṣeran) 讚辭を宣揚せず (na praśaṅsām abhyudīrayeyur) 高揚しなご (na samudīrayeyur) せいぜいあるならば、その間は、私たちが上ご下ごしなごしなごせず (mā tāvad aham anutarāṅ samyaksambodhim abhisambudhīyem)。

これはシナ訳『無量寿経』第十七願に相応する個所であり、梵文も十七番目の誓願文である。

主語は「諸仏・世尊たち」であり、*parikirtayeyur* は「更だ *varṇan* *bhāṣeran*, *prāsānsām* *abhyudrayeyur*, *samudrayeyur* と重ねてあらわされていて、いずれも「ほめて説く」の意である。ここでは否定文であらわされているが、肯定文としてみていくと、諸仏・世尊たちが称讃するのは、名号である。誓願文であるから、名号しかあらわされていないが、これは勿論アミターバ(無量光)如来(*Amitābha taḥgata*)の名号である。『無量寿経』が、他の經典における *pari-kirt* と異なる特色を持つのは、「ほめて説かれる」対象が、このアミターバ如来の名号であることである。

なお従来の梵文『無量寿経』の和訳のなかには、この *parikirtayeyur* を「唱える」と訳している例があるが、*parikirtayeyur* に「つづいて重ねて」「ほめて説く」意があらわされているように、それは誤りであろう。シナ訳で「称」の字があてられても、「ほめる」の意が原意であるのである。*parikirtayeyur* のみを「唱える」と訳しているのは、後世の口称念仏の「唱える」に近い意をあらわそうとしているように思われるが、少くとも梵文『無量寿経』の *pari-kirt* には「唱える」意はないであろう。今まで見てきた他の大乘經典の意味・用法と同じく、釈迦・諸仏が「ほめて説く」の意であって、口称念仏のように「衆生が唱える」というような意味はないのである。これらの問題については拙論⁽¹⁶⁾において既に論じておいた。

さて、諸仏がアミターバ如来の名号を称讃するというあらわし方は、△無量寿経▽の最初期の異本の一つである支謙訳『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』(ここでは、以下『大阿弥陀経』という通称を用いる)では、どう

なっているであろうか。

第四願。使^シ某^レ作^セ仏^ト時^ニ、令^メ我^ガ名^ヲ字^ヲ皆^ク聞^クニ八^ノ方^ノ上^ノ下^ノ無^ク央^ノ數^ノ仏^ノ國^ニ、皆^ク令^メ下^ノ諸^ノ仏^ト各^ク於^テニ比^ノ丘^ノ僧^ノ大^ノ坐^ノ中^ニ説^カ我^ガ功^ノ徳^ノ・国^ノ土^ノ之^ノ善^ヲ。諸^ノ天^ノ・人^ノ民^ノ・蜻^ノ飛^ノ・蠕^ノ動^ノ之^ノ類^ヲ、聞^ク我^ガ名^ヲ字^ヲ、莫^ク下^ノ不^ルニ慈^マ心^ヲ。歡^ニ喜^ニ踊^リ躍^ス者^ト、皆^ク令^メ三^ノ來^ニ生^セ我^ガ國^ニ。得^テ是^ノ願^ヲ乃^シ作^セ仏^ト。不^レ得^バ是^ノ願^ヲ終^ニ不^レ作^セ仏^ト。(47)

これは二十四願が説かれているうちの、第四願であり、シナ訳『無量寿経』の第十七、十八の両願に相應する個所である。ここに、

皆^ク令^メ諸^ノ仏^ト各^ク於^テ比^ノ丘^ノ僧^ノ大^ノ坐^ノ中^ニ説^カ我^ガ功^ノ徳^ノ・国^ノ土^ノ之^ノ善^ヲ

とある。またこの『大阿弥陀経』巻下の終りの方に、

仏^{ハク}言^フ。我^カ説^クニ阿^カ弥^ニ陀^ノ仏^ノ功^ノ徳^ノ・国^ノ土^ノ快^ク善^ク、風^ノ夜^ノ尽^ニ一^ノ劫^ヲ、尚^ダ復^タ未^ダ竟^ハ。(48)

とあって、

釈迦・諸仏が阿弥陀仏の功德・極樂の快善を「ほめて」説く。

とあるが、『大阿弥陀経』には阿弥陀仏の名号を直接称讚の対象とする個所は見当たらないようである。梵文と対照してみても、「アミターバ如来の名号を称讚する」とある梵文の個所に相応するところは、『大阿弥陀経』には一カ所も存在しない。

この事實は、『八千頌般若経』をはじめとして、『法華経』、『阿弥陀経』に認められる「釈迦・諸仏がもろもろの功德を称讚する」という、いいあらわし方のほうが、「釈迦・諸仏が名号を称讚する」といういいあらわし方より、古いのではなからうか、ということを推定せしめる有力な手がかりであるように思われる。

d) *tasya khalu punar Ānanda bhagavato 'nitābhāṣya tathāgatasya daśasu dikṣv ekaikaśyañ diśi Gaṅgānadivālukāsamesu buddhākṣetreṣu Gaṅgānadivālukāsamā buddhā bhagavanto nāmadheyān parikīrtayante, varṇaṅ bhāṣante, yaśaḥ prakāśayanti, guṇam udirayanti.*⁴⁹

(また更に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガンジス河の砂〔の数〕に等しい〔ほどの多くの〕仏国土において、ガンジス河の砂〔の数〕に等しい〔ほどの多くの〕諸仏・世尊たちは、かの世尊アミターバ如来の名号を称讚し〔nāmadheyān parikīrtayante〕、讚歎を説き〔varṇaṅ bhāṣante〕、名号を説き明かし〔yaśaḥ prakāśayanti〕、功德を称揚する〔guṇam udirayanti〕。)

これはシナ訳『無量寿経』の、いわゆる第十七願成就文といわれているところに相応する個所であるが、端的に、

諸仏・世尊たちは、かの世尊アミターバ如来の名号を称讚する。

というように、「称讚する」(parikīrtayante) が用いられている。そして、アミターバ如来の、「讚歎を説く」場合には *varṇāni bhāṣante* 「名声を説き明す」場合には *yaśaḥ prakāśayanti* 「功德を称揚する」場合には *(guṇān udirayanti)* とあらわされ、いずれも「ほめて説く」意であり、その主語は諸仏・世尊たちである。なお、梵文『無量寿経』では、この個所だけに「功德を称揚する」という表現があるのであるが、シナ訳『無量寿経』では、この個所全体に相応する部分が、

十方恆沙諸仏如来、皆共讚歎無量寿仏威神功德、不可思議⁽⁵⁰⁾

とあらわされていて、名号ではなく「無量寿仏の威神功德、不可思議なる」ことが讚歎の対象となっている。

(c) *imānī khalv ānandarthaśaṣaṁ* saṁpaśyantas, te tathāgatā daśasū dikṣv aprameyāsānikhīyeyāsu*

lokadhātuṣu* tasyāmītibhasya tathāgatasya nāmadheyam parikirtayanto, varṇaṁ* ghosayantaḥ, prāsānsām abhyudīrayanti.⁶¹⁾

*藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿经・阿弥陀经』所収)による。

(実に、アーナムズよ、この道理を見て、かの如来たちは、十方の無量・無数の世界において、かのアマターズ如来の名字を称讃) (nāmadheyam parikirtayanto) / 讃歎を言ふ (varṇaṁ ghosayantaḥ) / 讃誦を宣揚す (prāsānsām abhyudīrayanti)。⁶²⁾

ルリビゾ、名字を称讃の称讃とナラザルビゾ、 parikirtayanto ビゾムヤハルビゾ。 varṇaṁ の場合、ルリビゾ、 ghosayantaḥ、 prāsānsām の場合、 abhyudīrayanti とゾムヤハルビゾ。 主語は「如来たが」(tathā-gataḥ) であるが、勿論、諸仏・世尊たちと同じ意である。

f) ………, yasya tani nāmadheyam anāvarṇaṁ daśadiśi loka viḥṣuṣṭam ekaikasyān diśi Gaṅgā-nadivālikāsamā buddhā bhagavanto varṇayanti, stuvanti prāsānsanty, asakīd asakīd asanḡavāco* prativākyaḥ*.⁶³⁾

*藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿经・阿弥陀经』所収)による。

(…………、十方の世界に滞りなくとどろきわたった名字を、それぞれの方角におけるガンジス河の砂〔の数〕に等しう〔ほど多への〕諸仏・世尊たちが、繰返し繰返し、よごみのない言葉、さまたげのない言葉で、讃歎し

(varṇayanti) 讃美し (stuvanti) 賞讃するのびめ (praśamsanti)。

この二は pari-^レkirt を語根とする語はなごが、pari-^レkirt とおいたく同じ「ほめて説く」意の varṇayanti, stuvanti, praśamsanti が使われている。「ほめて説く」主語は、諸仏・世尊たぎであり、その対象は各名びめ²⁹。

㊿ etenājita parvāyeṇa paripūrṇakalpakotīnayatam nāmadheyāni parikīrtayeyam teśāṃ tatbhāgātānāṃ, yebhvas te bodhisattvā upasamkrāmaṇi Sukhāvatiṅ lokadhātūṅ tam Amitābhaṅ tatbhāgātāṅ draṣṭuṅ vanditūṅ paryupāsītūṅ, na ca śakyaṅ paryanto 'dhigantum.³⁰

(アジタよ、このようなわけで、私が、満コーティ・ナユタ劫の間、かのアミターバ如来にまみえ、礼拝し、仕えるために、極楽世界に赴くかれら菩薩たぎが属しているところの如来たぎの名号を称讚するとしても (nāma-dheyāni parikīrtayeyam teśāṃ tatbhāgātānāṃ) 〔ただだけ称讚するとしても、その〕際限は知ることができなごのびめ。)

この個所では、梵文『無量寿経』で、「名号を称讚する」という用法は、アミターバ如来の場合だけではなく、他の仏国土の如来たぎの名号の場合にも用いられていることを知ることができる。これは、『大阿弥陀経』の、

我但説カシニニ 八方上下無央数諸仏名字、晝夜一劫ストモ 尚未ダ竟ヘ。(54)

とあるのにも、対応しているから、かなり古層に属する部分であろう。

ここの「称讚する」とは、如来たちの名前を「一つ一つ取りあげ、説きのべる」の意であろう。本論の、(三)『十地経』の意に近いもののように思われる。主語は「私」とあるが、釈尊である。

さて以上の用例より見て、梵文の『無量寿経』と『阿弥陀経』とを対比してみると、次のようなことが知られる。すなわち、両者ともに、「称讚する」の主語は釈迦・諸仏であり、その「称讚する」の意味は、「ほめて説く」というのが主となっているが、『阿弥陀経』の場合には、「称讚する」対象は、「もろもろの功德」であったのが、『無量寿経』では、アミターバ如来の「名号」であるのが、一番中心となっている。

ところで、『無量寿経』の「釈迦・諸仏がアミターバ如来の名号を称讚する」ということは、シナ、日本においては、『観無量寿経』の、「下品上生」や「下品下生」などで説かれている悪業をつんだ愚人である衆生でも、善知識のすすめによって「称南無阿弥陀仏」、「称帰命無量寿仏」と仏名を称するが故に、五十億劫、八十億劫の「生死之罪」が除かれるという、「衆生が阿弥陀仏の名号を称える」ということと、出会うのである。特に、『観無量寿経』の「下品下生」に説かれているところの、

如^キレ此^ノ愚人、臨^{ミテ}ニ命終時、遇^{ハン}下善知識種種安慰^{シテ}ニ妙法^ニニ教令^{ヘテ}ニ念^ム上^セ。彼^ノ人苦逼^ニ、不^レ邊^{アラ}ニ念^ム仏^ニ。善友告^{ゲテ}言^ク。汝若^シ不^レ能^ハ念^フニ^{ズルコト}、^{※(一)}彼^ノ仏^者、心^ニレ称^ス歸命無量壽^ト。如^レ是至^ニ心^ニ、令^{メテ}ニ声^ヲ不^レ絶^エ、具^{シテ}ニ十念^ヲ、称^{セン}ニ南無阿弥陀^ト。称^ニニ仏名^ニニ故^ニ、於^テニ念念^中、除^クニ八十億劫^ノ生死之罪^ヲ。命終^ノ時[、]見^ン下金蓮^花、猶^如ニ^{※(二)}日輪^ノ、住^{スル}中^ノ其人^ノ前^上。如^ニニ一念^ノ頃^ニ、即^チ得^ニ往^{スル}生^ニ極樂世界^ニ。……………⁽⁵⁵⁾

※(一) 彼流布本作此。

※(二) 〔歸命〕一〇、〇、〇スタイン本一五一五、流布本亦同。

※(三) 時ニ後動スタイン本一五一五。

※(一) 〔彼仏〕一〇スタイン本一五一五、流布本亦同。

※(二) 〔阿弥陀〕一〇スタイン本一五一五。

※(三) 花ニ華〇スタイン本一五一五、流布本亦同。

の「具足十念、称南無阿弥陀仏」は、シナ訳『無量寿経』第十八願の、

設^ヒ我^レ得^シニ仏^ヲ、十方衆生、至^{シテ}心信樂、欲^{ヒテ}レ生^レニ我國、乃至十念、若^シ不^レ生^レ者、不^レ取^ラニ正覺^ヲ。唯^ク除^クニ五逆^ト、誹^ト謗^ヲ正法^ヲ。⁽⁵⁶⁾

の「乃至十念」や、いわゆる流通分の最初のところの、

仏^リ語^マニ^{ハク} 彌^レ勒^ニ一其^レ有^ラ下^テ得^レ聞^クニ^{コト} 彼^ノ仏^ノ名^ヲ、歡^シ喜^シ踊^シ躍^シ、乃^チ至^ス一^ノ念^上。……………⁽⁵⁷⁾

の「乃至一念」などと結びあわされて、「衆生が阿弥陀仏の名号を称える」という、口称の念仏の根拠となつていく。そして、「称名念仏」として定着する。

そこで「釈迦・諸仏がアミターバ如来の名号を称讚する」ということについては、長い間、あまり注意が払われなかったのであるが、親鸞聖人がその著、『教行証文類』の「行巻」最初のところに、『大無量寿経』の第十七願にもとづいて、

謹按ニ 往相廻向ニ有ニ大行ニ有ニ大信ニ大行者則称ニ 无导光如来名ニ斯行即是撰ニ諸善法ニ具ニ諸徳本ニ極速円満真如一実功德大宝海 故名ニ大行ニ然斯行者出ニ於ニ大悲願ニ即是名ニ諸仏称揚之願ニ復名ニ諸仏称名之願ニ復名ニ諸仏咨嗟之願ニ亦可ニ名ニ往相廻向之願ニ亦可ニ名ニ選択称名之願ニ也⁽⁵⁸⁾

とあらわされて、その重要な意義を明らかにせられて以来、浄土真宗においては、衆生の口称念仏の根拠として、諸仏の称名が重んぜられてきた。

ところで、以上見てきた初期大乘經典における *pari-kirt* を語根する語は、釈迦・諸仏が功德や名号を「ほめて説く」という意味・用法のものであったが、ここに意味・用法の大転換が認められる經典がある。それは『悲華経』である。そこで『悲華経』を本稿の最後に見てみよう。

㊦ 『悲華經』

『悲華經』は『無量寿經』と対同する本願文などが見られることで有名であるが、奇妙なことに、シナ訳および梵文『無量寿經』第十七願に対応する梵文『悲華經』の願文では、

a) bodhiprāptaya ca mamāprameṣṭv asanikhyeṣṭu anyeṣu buddhakṣetreṣu buddhā bhagavanto
varṇabhāṣaṇaṁ kuryur ghoṣaṁ cānuśrāvayeyur yaśa udirayeyuḥ.⁵⁹⁾

(私がさとりを得たときに、無量・無数の他の仏国土における諸仏・世尊たちは「私の」讃歎を説くことをし、「私を讃歎する」音声を宣へ、名声を称揚してくれるようにだ。)

とあって、*pari-kirt* を語根とする語も、称讃の対象である名号も出ていない。

ところが、この *pari-kirt* を語根とする語は、『悲華經』所説の観音菩薩の普願の中に用いられているのである。その個所を取り出してみよう。

b) yad ahaṁ bodhisattvacaryām careyaṁ ye kecaṇasattvā duḥkhopīḍā bhayataritā dharmadur-

bhikṣāṇḍhakāre pravṛṣṭā Inā dīnā atrāṇā aśaraṇā aparāyaṇā mām anuṣmareyuh, nāma ca parikīrtayeyuh. yady ahaṁ divyena śrotreṇa śṛṅgyām divyena cakṣuṣā paśyeyāṁ, na ca tāṁ sattvān vyasanebhyaḥ parimocayeyāṁ, nāhaṁ anuttarāṁ samyaksaṁboddhīm abhisambuddhyeyāṁ. yadāhaṁ bhādaṁta bhagavan sattvatehoṣ cirapraṇīdhānaviśeṣeṇa ciram bodhisattvacaryāṁ carisyāmi tadā me āsāparipūrir bhavatu. (60)

(もし、ある衆生たちが、苦にせめられ、恐怖におびえ、教えの乏しい黒闇の所に堕ち込み、心沈み、臆病となり、救いなく、依りどころなく、保護なくして、私を念じて (anuṣmareyuh)、そして「私の」名を (nāma)、称える (parikīrtayeyuh) ならば、私は菩薩行を行じたい。もし、私が天耳をもつて聞くことができず、天眼をもつて見ることができず、そしてこれらの衆生たちを逆境より解放することができないのであるならば、私はこの上ない正しいさとりをさとりません。大徳・世尊よ、私が衆生たちのために、昔の、特別な誓願によって、長い間「かかって」菩薩行を行するとき、私の願いの成就があらんことを。)

この観音菩薩の誓願の中に見られる nāma ca parikīrtayeyuh は、主語が「衆生たち」であり、明らかに、衆生たちが観音菩薩の名を (nāma) 「口でほめ、称える」という意味で用いられている。曇無讖訳『悲華经』では「若有衆生……若能念我、称我名字」とある。(61)

このように、主語が「衆生たち」であり、名を「口でほめ、称える」という意味をもつ parikīrt 語根とする語は、これまで見てきた、いわゆる初期大乘經典には、見られないものである。ここに『悲華经』が重要な意味

を持つことになるとはなからうか。

『悲華經』は、内容から見て、明らかに『無量壽經』以後の成立であり、また現存するシナ訳の、失訳『大乘悲分陀利經』および曇無讖訳『悲華經』と『觀無量壽經』は、ほとんど同じ五世紀のはじめ頃に、中国において翻訳せられている。そして觀音信仰は、『法華經』・「普門品」によつて、西域各地に宣布せられ、特に砂漠を旅する人々にとつては、

sa ca sārthavāstain sārthamevaṃ brūyāt, mā bhaiṣṭha kulaputrā mā bhaiṣṭhābhayaṃdadamava-
lokiśṭvarāṇi bodhisattvaṇi mahāsattvamekasvareṇa sarve samākṛandadhvam, tato yūyamaśmā-
ccaaurabhayādāmnitrabhayaṭkṣiprameva parimokṣyadhve, atha khalu sarva eva sa sārtha ekasvareṇā-
valokiteśvaramākṛandet, namo namasasmā abhayaṃdadāyāvalokiteśvarāya bodhisattvāya mahāsa-
ttvayeti, sahanāmagrahaṇenaiya sa sārthāḥ sarvabhayebhyaḥ parimukto bhavet, idṛśāḥ kulaputrā-
valokiteśvarasya bodhisattvasya mahāsattvasya prabhavaḥ.⁽²⁾

(また、かの隊商の長がその隊商の一団に次のように告げるとしよう。

「善男子たちよ、恐れるな、恐れるな、安全を与えて下さる觀音菩薩・大士〔の名〕を、声をそろえて、みんな唱えなさい (samākṛandadhvam)。そうすれば、お前たちはこの盜賊の危難、敵の危難から、速かに解放せられるであらう」と。

そのとき、かの隊商の一団のすべての者が、声をそろえて、

「かの安全を与えて下さる観音菩薩・大士に南無したてまつる、南無したてまつる」と観音〔の名〕を呼んだとしよう (akrande)。

名を唱えるやいなや (sahanamagrahanaiya) かの隊商の一団はあらゆる危難から解放せられるであろう。善男子よ、観音菩薩・大士の威力は、このようなものである。

と説かれているような、衆生たちが、「南無観音菩薩」と観音〔の名〕を呼べば、いかなる恐怖、危険、困難のなかにあっても、救うという称名のすすめは、非常な勇気づけであったであろう。⁽⁶³⁾

「衆生たちが名を称える」という系譜は、『法華経』・「普門品」、『悲華経』の観音信仰や、『観無量寿経』の「下品上生」や「下品下生」に説かれる弥陀信仰等(いわゆる諸観経類・仏名経類も含む)に見い出されるのであるが、特に『悲華経』においては、「(釈迦・諸仏が)称讃する」というように、初期大乘経典で用いられてきた pari-kirt を語根とする語を、転換させて「(衆生たちが)称える」意に用いているのである。

ここに称名思想の系譜を考究する手がかりがあるように思われるが、そのことについて別稿にゆずりたい。

以上で、シナ訳『阿弥陀経』の「讃歎」、「称讃」、「称説」に相応する梵文『阿弥陀経』の pari-kirt を語根とする語が、梵文の大乘経典において、いかに用いられているかの大要を知ることができるであろう。(完)

註

- (1) 『大正藏』一二卷、三四七頁、中段。
- (2) Sm. Sukh., pp. 96-97.
- (3) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』二一三頁—二一四頁。
- (4) 河口慧海『藏和对訳・阿弥陀経』(『梵藏和英合璧・浄土三部経』所収) 三四八頁。
- (5) 『大正藏』一二卷、三五〇頁、上段。
- (6) 藤田宏達、前掲書、二一四頁。
- (7) 同 右。
- (8) Sm. Sukh., p. 99. によると、功德は複数であらわされているので、「もろもろの功德」とする。以下同じ。
- (9) 『大正藏』一二卷、三五〇頁、上段—下段。玄奘訳『称赞浄土仏撰受経』は十方段であるので、「説誠諦言」も十カ所にあつる。
- (10) 同右、三四七頁、中段—三四八頁、上段。
- (11) Sm. Sukh., pp. 97-98.
- (12) この「聞是経受持者及聞諸仏名者」が、流布本では「聞是諸仏所説名及経名者」となっていることについては、藤田宏達、前掲書、二一五頁を参照。本論でも後に少し閑説する。
- (13) 『大正藏』一二卷、三四八頁、上段。
- (14) Sm. Sukh., p. 99.
- (15) 藤田宏達、前掲書、二一四頁—二二〇頁参照。
- (16) 拙論『阿弥陀経』読解(上)〔『同朋大学論叢』第三十七号、一頁—一四頁〕
- (17) 『大正藏』一二卷、三四七頁、中段。
- (18) Sm. Sukh., p. 96.

- (19) 藤田宏達、前掲書、二一九頁—二二〇頁参照。
- (20) 『大正藏』一二卷、三四八頁、上段。
- (21) Sm. Sukh., p. 99.
- (22) Ibid., p. 99.
- (23) 藤田宏達、前掲書、二一九頁—二二〇頁。
- (24) 「梵文『無量寿经』における諸仏と衆生の呼応—特に称名と聞名に関して—」(『同朋仏教』第五号、所収)
- (25) P. L. Vaidya, *Aṣṭasahasrikā Prañāpāramitā*, p. 40.
- (26) Ibid., p. 40.
- (27) Ibid., p. 41.
- (28) Ibid., p. 115.
- (29) Ibid., p. 207.
- (30) Ibid., p. 248.
- (31) Ibid., pp. 222-223.
- (32) H. Kern and Bunyiu Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīkā*, p. 56.
- (33) Ibid., p. 317.
- (34) Ibid., p. 335.
- (35) Ibid., p. 375.
- (36) 拙論「梵文『無量寿经』における諸仏と衆生の呼応—特に称名と聞名に関して—」(『同朋仏教』第八号、所収) 一一六頁参照。
- (37) *Saddharmapuṇḍarīkā*, p. 339.
- (38) Ibid., p. 385.
- (39) Ibid., p. 340.
- (40) Ibid., p. 375.

- (41) Ryūko Kondō, *Daśabhuṃśvaro nāma mahāyānastram*, p. 7.
- (42) *Aṣṭasāhikā Prajñāpāramitā*, p. 40.
- (43) Atsuuji Ashikaga, *Sukhāvativyūha*, pp. 8-9.
- (44) *Ibid.*, p. 37, cf. p. 40.
- (45) *Ibid.*, p. 13.
- (46) 「梵文『無量壽經』における諸仏と衆生の呼応―特に称名と聞名に關して―(上)・(中)・(下)」〔同朋仏教〕第五号、六・七合併号、八号、所収
- (47) 『大正藏』一二卷、三〇一頁、中段。
- (48) 同右、三一七頁、上段。
- (49) *Sukhāvativyūha*, p. 41.
- (50) 『大正藏』一二卷、二九二頁、中段。
- (51) *Sukhāvativyūha*, p. 43.
- (52) *Ibid.*, p. 55.
- (53) *Ibid.*, p. 62.
- (54) 『大正藏』一二卷、三一七頁、中段。
- (55) 同右、三四六頁、上段。読み方については、『真宗聖教全書一』を参照した。
- (56) 同右、二六八頁、上段。読み方については、『真宗聖教全書一』を参照した。
- (57) 同右、二七九頁、上段。読み方については、『真宗聖教全書一』を参照した。
- (58) 『親鸞聖人全集』第一卷(保存版)、一七頁。
- (59) Isshi Yamada, *Karuṇāpūṇḍarīka*, Vol. II, p. 110.
- (60) *Ibid.*, p. 118.
- (61) 『大正藏』三卷、一八五頁、下段。
- (62) *Saddharmapūṇḍarīka*, p. 441.

- (63) 『法華経』には、他にも、「一度でも南無仏と唱えたならば……かれらはすべてこの最高のさとりに到達したものだ」となるであろう。〔Saddharmapundarika, p. 52〕というような称名思想もある。藤田宏達、前掲書、五五九頁―五六〇頁参照。

〔付記〕 本稿は、「同朋大学論叢」第三十七号に発表した『阿弥陀経』読解(上)」、および「東海仏教」第二十三輯に発表した『阿弥陀経』読解(中)」の続きであります。御了承頂きたく、一言付記いたします。

(五三、八、三二)